富山県現代俳句協会会報

Toyama Prefecture Modern Haiku Association Newsletter

第64号

令和7年7月1日発行

変化の時代での俳句

富山県現代俳句協会会長　高木 昭夫

トランプ関税、米価高騰、オレオレ詐欺の激化など、驚くことばかりが起きている。北陸地区でも福井県が三県協議会から離れるという事が起きた。本部の一般社団法人化に伴う新制度に合わせて判断とのことであるが、福井県の意思を尊重しようと思う。そんな中で先に第32回北陸現代俳句大会が金沢市で開かれ、講師の秋尾敏先生へ質問が二つ出た（一つは私からであるが）。一つは俳句でＡＩが人間を追い越すかという事。今一つは類句類想句の線引きへの考え方について。前者ではＡＩにはデータの蓄積はあるが人生がないということ、後者では類句類想句の基準は各団体に委ねられているのが現状との見解であった。が、今後も二つの脅威に晒され続けると思う。であればこそ日々の中での発見を心掛けようと思う。変化の時代だからこそしっかりと自然を、生活を、人生を詠めればと思う。俳句こそ変化の時代にふさわしいものかもしれない。

令和七年度 富山県現代俳句協会 定期総会・春季俳句大会

【定期総会】

三月二十三日（日）午後一時から、富山県教育文化会館集会室において、富山県現代俳句協会の定期総会と春季俳句大会を開催した。出席者は四十三名。総会時点の会員は正会員六十七名、賛助会員は五十四名、計百二十一名である。総会では物故会員に黙祷を捧げ、吉田久夫事務局長が開会を宣言し、高木昭夫会長の挨拶があった。現代俳句協会定時社員総会の報告や、協会会員や結社会員増加の手立てとして、公民館や町内会を利用してのミニ句会開催の提案があった。また地元大学での俳句活動の現状を踏まえ、今後の俳句活動のあり方を述べ挨拶とした。次に白井重之名誉会員を議長に選出し、総会議事に入った。吉田久夫事務局長から二〇二四年度の事業報告、栃原百合子会計から同収支決算報告、河合彰監事から監査報告があり、それぞれ承認された。次に二〇二五年度の事業計画案と収支予算案が審議され、こちらも原案通り満場一致で承認された。続いて規約の一部改正案、役員の一部変更案を提案し、承認された。白井議長の降壇に伴う挨拶、吉田事務局長の終了宣言で定期総会を終えた。

【春季俳句大会】

一人一句の投句葉書を会員・賛助会員全員に郵送し、二月二十八日（金）を締切日として募集した。その結果八十一句の投句があり、句会出席者四十三名が一人五句の選句を行った。点数を集計する間に、高木会長、森野顧問、櫻打副会長が選句した句について講評を行った。その後、点数の集計結果を発表し、表彰式を行った。最後に櫻打副会長が閉会の挨拶をし、春季俳句大会を終了した。

富山県現代俳句協会
発行人　高木 昭夫
編集人　鈴木 幸雄
事務局　吉田 久夫
〒九三三―〇一〇二　小矢部市水島七六
TEL　〇七六六―六一―二七七七

春季俳句大会の入賞・入選作

天位　気嵐の中から夫の船帰る　坂田　直彦

地位　雛の間に座せば母ある心地ふと　山下久美子

人位　戦場に黙し種蒔く農婦かな　高島　詩香

四位　つまづきて杖持ち直す朧月　高嶋　幸子

煙突の煙まっすぐ鳥帰る　吉塚三津枝

双六やはしやぐ一人は変声期　浜田　律子

越中を行きつ戻りつ雪女郎　柄沢　恭子

五位　春光や朝市婆の英会話　鈴木　幸雄

大樹より芽吹きの唄の聞こえをり　藤田　孝

春キャベツ一こ手に載せふと地球　久保美智子

次々と孵る水底春の闇　吉田　久夫

六位　摺り足で踏み入る仏間春灯し　細野　千里

車椅子の母の手伸びる雪の枝　坂田　紀枝

缶コーヒープシュッと開けて春立てり　河岸　佳子

寒満月学業終えし荷を括る　田中　憲子

寒の月被災更地の水たまり　西田　広子

七位　山の影山に映りて日脚伸ぶ　大倉　寿恵

耕しの腰伸ばすたび空がある　八尾とおる

余生とは採れたて囲む根深汁　垣内　和代

軒氷柱雫にリズムポップ調　高木　博子

春の風連れて五十路の娘来る　飛世　峰子

八十路春試験に初のタブレット　古田　明子

旧友と尽きぬ思ひ出春炬燵　宮﨑あつ子

親子では住めぬふるさと大氷柱　宮西　昌子

八位　体温を育ててをりぬ葱坊主　高木　昭夫

板の間といういいところ日脚伸ぶ　吉本　敏子

薄氷挙骨に空割れにけり　二口わこう

高島詩香さん

坂田直彦さん

山下久美子さん

作者の思い

天位　気嵐の中から夫の船帰る　坂田　直彦

「おんせんみたいにゆげがもくもくあさのうみ」小学二年生の句である。水蒸気が白く霧状になるさまを言うが、海神の仕業とも思える早朝の冷え込みの厳しい時に見られる現象である。朝の散歩で気嵐を見ながら海岸を歩いたのだが、漁港では帰港を待つ人たちが、気嵐の濃さを話し合っていた。岸からみているのではその広がりは分からない。気嵐の中では何も見えないのだと思う。そんな気嵐の中からそれこそ「ぬっ」と漁船が現れた。無事に帰港したのである。「父の船帰る」も考えたが「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」

地位　雛の間に座せば母ある心地ふと　山下久美子

自身の子育ての頃「夏草や父母の青春いくさの日」という句を作ったことがある。戦中に青春、戦後に子育ての日々を送った両親に、お雛さまを買う余裕などあろう筈もなく、母と唄う「あかりをつけましょぼんぼりに」の歌だけを楽しむ四人きょうだいであった。そんな両親が、それぞれの孫達のためにお雛さまと兜を買ってくれた。そして「さとこちゃん、ちゃんとひしもちもあるよ」と小さな娘に言った。おひなさまと言えない娘は「ほいなちゃま、ほいなちゃま」と言ってよろこんだ。お雛さまを見るとき、かたわらにそっと母を感じる。耳底にはゆっくりやさしい唄声も……。

人位　戦場に黙し種蒔く農婦かな　高島　詩香

哀しいことに理不尽な戦争が世界の各地で起きている。現地の人々の悲しみや恐怖は、ニュースなどの映像を頼りに思いを巡らしてみても、心中察するに余りある。

大切なものを破壊され奪われ、死と隣り合わせの毎日を送る人々。しかし、そういう状況下であっても命をつなぎ、子供の腹を満たしてやりたいと強く願うであろう。何かを言うことをやめ、生きるためにただひたすらに種を蒔き収穫する。爆撃に阻まれてもまた種を蒔く。武器は持たずとも、黙して戦争に抗っている、そんな逞しい女性の姿を思い浮かべてこの句を作った。

第三十二回北陸現代俳句大会

五月十七日（土）石川県女性センターにおいて、第三十二回北陸現代俳句大会が開催された。富山県関係者の入賞・入選は次のとおり。

大会入賞作品

二位　二ン月や生命線にのる錠剤　久﨑富美子
四位　恐竜を駅に残して鳥帰る　高島　詩香
　　大地震の割れたる地より草青む　藤田　孝
六位　大寒の刻垂直に突き刺さる　森川　敬三
七位　階段は長いし初雪は滑るし　森野　稔
　　天界でつながる戦地冬銀河　吉田　久夫
　　雪のひまじわり大陸移動説　高木　昭夫
　　今日少し遠出しようか春セーター　吉田　久夫
　　この海のむかいは能登や春よ来い　吉田　憲子

講師　秋尾敏先生選

特選

大寒の刻垂直に突き刺さる　森川　敬三

入選

鉢物へ米のとぎ汁梅雨明ける　細野　千里
山里の狐減りたり午祭　高田　実
鳩の名を問ふて答へて掲示板　寺林美智子
加速度の計算式のa　雪解　森川　敬三
雪柳うらがへさうとすれば散る　畠山　美邑
寒晴を仰ぐに鳴らすパイプ椅子　久﨑富美子
恐竜を駅に残して鳥帰る　高島　詩香

地区役員特選句（入賞者の名前のみ掲載）

宮西昌子、久﨑富美子、森川敬三、吉田久夫、久保美智子、吉田憲子（二句）、森野稔（二句）、高木昭夫、柄沢恭子、高島詩香

現代俳句鑑賞（Ⅱ）　森野　稔

三月十日も十一日も鳥帰る　金子　兜太

（句集『百年』所収）

句集では「東日本大震災以降　十五句」と前書が付された作品である。この句について身を以って被災を体験した高野ムツオは、何もなかった震災の前日の平常時、そして予想だにしなかった悲劇に見舞われた当日を並べて鑑賞した。つまり渡り鳥にとってはこの二日間の出来事は何の関わり合いがない。鳥だって人間以上に生きていくのに必死なのである。その必死の日々を当然の日常として帰ってゆく鳥への畏敬の思いの句として鑑賞した。ところが作者である兜太の思いは違うようだった。三月十日は死者十万五千人余りを出した東京大空襲日を念頭に置いてこの句が作られたというのである。三月十日は完全に人間が引き起こした災禍、十一日にしても自然災害の側面が多いにしても人間が引き起こした災禍も混じっている。そんなドロドロした人間社会とは関りがなく渡り鳥は渡り鳥として日々生きているということである。この鑑賞を前にして俳句には正解がないということを痛感する。つまり作者の思いはあるにしても作品を発表してしまえば、俳句は読み手に任されるということである。この二つの鑑賞をもたらした背景がそれぞれある。ムツオは被災当日、出先の仙台から長時間かけて住居のある多賀城市まで歩く途中に悲惨な災禍を目の当たりにした。だから前日の平穏な日常が愛しく感じられる。かたや戦争体験者としての兜太は心に深く刻まれた戦争の傷跡を幾つも持っている。そしてまたこのような災禍……。この差異、すなわちそれぞれ生きて来た時間や時代の相違、体験の相違がこのような鑑賞として顕われるのは当然のこととして受け入れるしかない。私たちは、どちらの鑑賞の側に立つかは自由であるが、大切な事は両方の鑑賞に横たわる批判精神である。これを見落としてはならない。

海底に白き蟹群れ良夜かな　中村　和弘

（句集『荊棘』所収）

昨年末刊行され、まだ評価の定まっていない句。海上の明るい風景の中にその下に広がる海底を想像する。戦争・海難事故によって失われた海没死者が脱皮して白い蟹となり暗い海底に犇めく。そして新たな海没者を喰い尽くそうとして群がっている。死者ばかりではない、他の生き物、はてはライバルの蟹同士が喰らい合ってもいる。この様子、現在の人間社会における現象に似てはいないだろうか。そしてその現象は、人の世の過去であり、現在であり、また哀しいことに未来でもある。海上が美しい世界だけにその空想は人間の哀しみを象徴しているようだ。

結社便り

（順不同）

「海原」

◇海原富山支部　休会中

「寒潮」

◇現代俳句誌 寒潮 三三六号～三三八号　発行

◇寒潮　結社内の「大沢野俳句会」の七名が当地にある「ゆ～とりあ越中」のロビーにおいて、四月の一ケ月間、作品展示会を開催しました

藁屋根の主はわたし　菫草　二口わこう
縁先には待ちかねし堅香子の花　稲生みゆき

「草樹」

◇会報一二〇号～一二六号発行　月一回の句会を継続

小走りのファーストシューズ春の草　兒堂　衣代
猫に名を呼ばれて春の夢の中　飯干ゆかり
人はみな良き名をもらい桜草　吉田　久夫
春の野に試歩の五感を開きけり　亀谷　正恵
寒の風訪い潦乱す　森川　敬三

「喜見城」

◇俳誌「喜見城」八九五号～八九七号発行

◇花見吟行会を開催。日時：四月六日（日）

場所：もくもくホール　参加者十九名

満開の花の向かうを新幹線　宮﨑あつ子

風はいま雲を散らせて朝ざくら　河岸　佳子

海を見て山見てしだれ桜かな　川上　弥生

花ひらく日毎変はりし嬰の顔　中田　広美

このへこみ獣跡かも花の山　高木　昭夫

この奥にパンの工房山ざくら　大久保置箔

「峡谷」

◇俳誌「峡谷」第六八号発行（五月一日）

◇第二六回黒部市詩道句集事業

八尾主宰が委員長にて選定

最優秀句「トロッコの軋みて曲がる風青し」

滋賀県　長倭子

◇「峡谷」年次大会（予定）

日時：六月十三日　場所：浦山交流センター

「高志」

◇俳誌「高志」五三五号～五四〇号発行

◇総会並びに高志四十五周年記念俳句大会

日時：令和七年六月二十二日（日）午後一時

場所：高岡市立牧野公民館　事前投句

参加費：千円

◇最近の「高志」から

桟橋の足のぶらぶら春休み　細野　千里

兄の訃の受話器を下ろす春の雪　坂田　紀枝

新しい補聴器お濠の亀鳴くか　大野　康子

秋爽も二つに折りて投票す　加藤　英一

春眠の顔をくすぐる猫の髭　坂田　直彦

「岳」

◇毎月第一第二水曜日　句会及び投句指導会を実施。

四月十四日（月）南砺市内の向野の一本桜を観桜し吟行句会を実施。

夜べの雨含みて白き花吹雪　古田　明子

散り兆すいま満開の桜花　幹　自聲

見つむれば己が身浮くる桜かな　久保美智子

「みのり俳句会」

◇四月定例句会（四月二十四日（木））

会員十六名。兼題（樹）一句と自由題句三句

計六十四句の作品が寄せられた。

春愁や樹木葬でと遺言す　中川　泰信

老人の老いゆく速さ竹の秋　高井由紀子

ちょっとだけ供へ草餅頂きぬ　佐伯　和子

◇定例句会　月一回　十一月二十日　吟行句会

「福田俳句会」

◇毎月第一日曜日に句会を開催

◇現代俳句協会に二名の入会者

風呑みて眼の迫りくる鯉幟　山岡ゆう子

爺笑うバレンタインの試作チョコ　西　和美

雪吊りを解かれ樹の息風の息　高島　詩香

蝌蚪に足南京錠の錆びており　吉塚三津枝

蒼い雪ただ降りしきる夜の底　河合　彰

寒卵今日を壊さぬように割る　久保　俊一

大旦方舟に似し雲ながれ　跡治　順子

「森」

◇結社誌「森」は本年六月で通巻一七七号。順調に発行を継続しているが、最近高齢化により会員数が漸減しているのが気がかり。秋には創刊十五周年を記念して年次大会を主宰の地元である朝日町で開催予定である。所属内結社は毎月八か所あり、それぞれ研鑽を深めている。

◇結社内「むつみ句会」では五月に富山城址公園で吟行会を開催した。

笹舟を橋下に入れ花は葉に　古澤　桃

若楓四脚門いま両開き　森野　稔

※レイアウトの都合により結社だよりが2ページにまたがりましたことご了承下さい

事務局便り

Ⅰ　役員会（八月）

期　日　令和七年八月十日（日）十三時～

場　所　富山県教育文化会館五〇三号室

議　題　秋季吟行俳句大会他

※欠席者は八月一日まで吉田事務局長に連絡下さい

Ⅱ　役員会（十一月）

期　日　令和七年十一月二十三日（日祝）九時～

場　所　富山県民会館七〇七号室

議　題　今年度の総括と来年度の計画他

終了後昼食会を予定。昼食代四千円

※欠席者は十一月十五日まで吉田事務局長に連絡下さい

Ⅲ　秋季吟行俳句大会

期　日　令和七年九月二十八日（日）

会　場　滑川市民交流プラザ三F多目的ホール

滑川市吾妻町四二六番地（滑川駅から徒歩五分）

＊正面駐車場の他、近くに第二駐車場も有り

吟行地　ほたるいかミュージアム・宿場町回廊めぐり・芭蕉句碑・施設上階から富山湾を眺望等

参加費　千円（当日会場受付時に支払い）

日　程　十時～　受付　短冊二枚交付

十一時三〇分　投句締切　厳守

十三時～　開会・選句・披講

十四時四〇分～シンポジューム形式で合評

登壇：顧問・三役・他（司会者含む）

十五時五五分～表彰式

Ⅳ　第五回富山県現代俳句協会賞募集

「第五回富山県現代俳句協会賞」の作品を同封の要項の通り募集します。正会員・賛助会員を問わず応募できます。ふるってご応募ください。（詳細は同封の資料を参照）

Ⅴ　第六十二回現代俳句全国大会作品募集

応募要領は「現代俳句4月号」に掲載してあります。皆様ふるってご応募ください。